

FOMA 連携でビジネス商材にPBX機能の信頼性が課題

SIPサーバーの商品ジャンルには、PBXから発展した製品以外に、ネットワーク機器メーカーが開発した製品がある。当初は通信系ディーラー/SIに見向きもされなかったが、N900iLの登場で、ソリューションの中心商材として担ぐところが現われてきた。

「ソフトウェアベースのSIPサーバーは、市場投入された当時に検証してみたが、PBX機能の完成度、機能数とも不十分で、われわれ通信系ディーラーが扱うに値する商材ではなかった」――昨年秋の段階で、ある有力通信系ディーラーの技術担当者こう語っていた。

SIPサーバーはその生い立ちから2種類に分けられる。①PBXメーカーがレガシーPBXをIP対応に発展させてSIPサーバーにした製品と、②ネットワーク機器メーカーが最初からSIPを基に開発したソフトウェア製品だ。

①は従来からの延長で通信系ディーラーが扱っているが、②を扱っている通信系ディーラーはこれまでほとんどなく、主にLAN/WAN系のNI/SIがVoIPを絡めたソリューションを提供する時にシステムに組み込んでいた。

だが今年になって、通信系ディーラーやSIのなかにも、自社ソリューションのメイン商材として担ぐところが次々登場してきた。

そこで、②のSIPサーバーのなかで、主にSOHOや中小規模事業所向けに販売されている製品を対象に、「通信系ディーラーやSIが扱う」とい

う観点で、製品動向と提案時の留意点を見ていくことにする。

N900iLの拡張SIPに対応

通信系ディーラーがソフトウェアベースのSIPサーバーに注目し始めたのは、NTTドコモのFOMA/無線LANデュアル端末「N900iL」がきっかけだった。

2004年12月に登場したN900iLは、当初はNECのSIPテレフォニーサーバー「UNIVERGE SV7000」シリーズにしか対応していなかった。その後、沖電気工業、日立コミュニケーションテクノロジー、富士通が相次いで対応。その一方で、中小規模事業所からもN900iLの導入ニーズが高まり、PBXメーカー以外からもいくつかの対応製品が登場してきた。

なかでも現在、一番ポピュラーな

のはNTTドコモの「MMQUBE3」だろう。100%子会社のドコモエンジニアリングがPASSAGE DUPLER対応システム「SIP:PKG mini」のSIPサーバーとして展開中だ。MMQUBE3は、ジェイリンクが開発したソフトウェア「LUTi IP-PBX」を採用している。

LUTiの最大の特徴は、N900iLの拡張SIPに完全対応している点だ。ジェイリンクの高橋邦明社長は「まだ他社の製品は十分ではない」と語る。

IP電話においてSIPは、発着信時だけでなく、保留や転送などの機能も制御する。だがIETFが発行しているRFCでは、これらのやり取りの詳細は規定していない。

そこでメーカー各社は、独自の解釈でSIPを実装する。これが「SIPの方言」である。また、標準SIPではすべてのPBX機能を実現できないため、各社はSIPを独自に拡張することで、PBXに近づけている。

N900iLも例外ではなく、標準SIPと拡張SIPを搭載。コールピックアップ(代理応答)や内線着信音と外線着信音の鳴り分けなどを実現している。

日立電子サービス(日立電サ)・サービス事業本部ネットワークサービス事業部ネットワークサービス開発部の白木辰夫主任は、「拡張SIPにきちんと対応している点がLUTi採用の決め手になった」と語る。つまり、両方のSIPに対応しているかどうか、ディーラー/SIがSIPサーバーを選択す

SOHO、小規模事業所向け



アイコムの「SR-5200VoIP2」。最大18台の無線IP電話端末を接続できる。フュージョン・コミュニケーションズやケイ・オプティコム050番号によるIP電話サービスに対応。本体で受けた着信をN900iLに転送することで通話コストの削減が可能



ユニデンの「CxServer500」。同社のIP電話システム「ワンダートークス1248」として販売。115×30×160mmの小型筐体を実現。12外線48内線の収容が可能

る大きな基準になっている。

ただ、拡張SIPにまで対応することは、必ずしもよいことばかりではない。N900iLの拡張SIPは、保留や転送などのシーケンスが標準SIPとかけ離れている。

ネクストジェン・営業部門統括の古賀英明執行役員は、「無理にすべてに対応しようすると、拡張性が犠牲になる。つまり、オープンプラットフォームとしてのSIPから逸脱し、端末やアプリケーションが限られてしまう」と指摘。こうしたことから同社では、ユニアデックスのFOMA連携ソリューション向けに提供中の「NX-E1000」に、RFC準拠の標準SIPのみを実装している。

部分導入ニーズに低価格製品

もう1つの大きな選択ポイントは、価格だ。FOMA連携ソリューションは新しい商材であるため、中小規模事業所でも「部分導入で試してみた

い」というニーズが多い。また、SOHOクラスからのニーズも増えつつあり、低価格製品へのニーズが高まっている。

この市場で先行したのはアイコムだ。同社は04年12月にSIPサーバー機能を搭載したワイヤレスブロードバンドルーター「SR-5200VoIP2」を市場投入した。接続可能な無線IP電話端末は18台で、他にアナログ電話用ポートを2つ備えている。価格はオープンだが、同社によれば「4万円前後」という。

小規模事業所向けでは、ユニデンのIP電話システム「ワンダートークス1248」がある。同システムのSIPサーバー「CxServer500」は、12外線48内線まで収容できる。同社は、汎用の無線LANアクセスポイントを追加するだけでN900iLが利用できるソリューションのサンプル出荷を開始している。

さらに2社以外からも、近々このク

IETF

Internet Engineering Task Forceの略で、インターネットに関する技術の標準を定める団体。IETFで策定された技術仕様は、「RFC (request for comment)」として公表されている